

# 高橋たか子にみる「悪意」と「母性」と 「キリスト教」

— 遠藤周作と比較して —

クロス 尚 美

## はじめに

キリスト教作家といわれる人は多い。その中で、高橋たか子が際立つ理由のひとつは、その作品にキリスト教を連想させる情景が少ないことではないだろうか。高橋たか子の描く世界には、激しい憎悪はあっても、愛情は欠落している。慈しみやさしささえも、弱々しく、いつも不幸をまとっている。明らかに母性がテーマになっていると思われるのに、そこには愛がない。救いもない。もし高橋たか子が仏文学を学びモリエールに傾倒していたことを知らなかったなら、あるいは若くして高橋和巳と結婚し、二人の生活を経済的に支え、後には病に倒れた和巳を献身的に看病したことを知らなかったなら、そして晩年は修道生活を続けたことを知らなかったなら、その作品の、とくに初期中期のものから、どれだけキリスト教の影響を読み取ることができたであろうか。

人間の罪と悪を主題にした作品というならば、もちろん遠藤周作を始めとする他のキリスト教作家にも通じるものである。

高橋たか子の作品に込められた、キリスト教作家としてのメッセージは、いったいなんだったのだろうか。作家として、フランス文学者として、さらにはカトリック信者として先輩であり、交友の深かった遠藤周作の場合と比較することで、高橋たか子にとって、「悪意」、「母性」そしてキリスト教が何を意味しているのかについて再考してみたい。

## 1. 作家としての高橋たか子

いったい、高橋たか子の描く世界は、異常なのだろうか。他者、とくに子どもを傷つけたい、殺したいと妄想し、あるいはそれを実行に移す女主人公たちは、決して尋常とはいえない。しかもそれが完全犯罪として成立してしまうのだ。しかし、鈴木（1999）は、女性の内心に潜む異常な衝動を描くことは、決

して高橋たか子の作風の特徴とはいえず、むしろ、敗戦後の日本の文芸の主流のひとつであると言う。近代母性のイデオロギーについては、欧米においても1960年代になって批判がたかまってくる。その発端となったのが、Betty Friedan (1963) の *The Feminine Mystique* である。1963年といえば、高橋たか子の翻訳『テレーズ・デスケール』が出版された年でもある。日本でフェミニズムの台頭を1970年代と考えると、高橋たか子は時代を先行していたと考えられるのではないだろうか。

本稿では、高橋たか子の著作活動を三期に分けて考察する。

高橋たか子は、1954年に京都大学文学部仏文科を卒業するが、1年留年して同じ時に中国文学科を卒業した高橋和巳と、その11月に結婚している。以来、高橋和巳の亡くなる1971年までの17年間を、本稿では高橋たか子の著作活動の第一期とする。第一期の前半は、高橋和巳の作品の清書のほか、生活を支えるためにいくつもの職を掛け持ちするなどして働いていた。翻訳もその仕事のひとつであったことは、その後の高橋たか子の執筆活動の糧となったことであろう。生活苦と高橋和巳という「人の気持ちの分からない」「狂人」との生活のありようは、後に『高橋和巳の思い出』（高橋 1977）としてまとめられている。高橋たか子は、修士論文のテーマに François Mauriac（フランソワ・モーリアック）を選んでいる。フランス語で書かれた修士論文は、その後日本語で発表されている。小説の手法をモーリアックに学んだことは、自ら認める通りである。その論文では、主要人物の扱いや、作中人物の、その時々的心境と風景との対比に注目している。中でも『空の果てまで』はモーリアックの代表作である『テレーズ・デスケール』に影響を受け（高橋 1994c）、それを後に高橋たか子が翻訳出版している。遠藤周作もこの作品に感銘を受けて『海と毒葉』を書いている（高橋 1973）。さらに遠藤周作もまた『テレーズ・デスケール』を翻訳している。

次に、高橋たか子の著作生活の第二期を、1971年に高橋和巳が亡くなってから1985年までの14年間としよう。この時期に、高橋たか子の特徴づける作品のほとんどが発表されている。

フランス文学、とくにモーリアックの強い影響を受けたことは、高橋たか子が近代的な意味での自由な自我を確立しているということだと、大橋（1981）は主張する。自我の直面する孤独や生の無意味さなどの諸問題を個別的な私小説の扱いでなく、人間の条件ともいえるべき次元に高めている点、狂気じみた異常さを明確に把握して小説を構成していく意志的方法において、やはり高橋たか子は特異であるというのだ。

では、高橋たか子は私小説化することなく、どう自我を確立し、表現していったのであろうか。高橋たか子（1975）は、その作品には自分の創りだした多くの自分の分身が散らばっていると語る。その数多い分身が、自分であって自分ではないことへの違和感を覚えている。そもそも、高橋たか子はヨーロッパ文学における虚構の概念を、日本文学に導入しようとしてきた第一次大戦後の作家たち、そしてそれに続く作家たちを文学的に継承していると自負している。現実の世界とはまるで違った世界を小説の中に創りだし、そこに「可能な私」を探究するというのが、高橋たか子の虚構の方法である。自分の継承した「生」とは違った「生」の中に、作家としての自分を見出す。この手法は、高橋たか子がモーリアックに学んだものといえる。

高橋たか子が西欧的かつ近代的な自我を確立しており、ヨーロッパ文学に強く影響を受け、その虚構の概念を取り入れた著作活動を、特に第二期、1970年代から80年代の前半にかけて、集中的におこなったことが分かる。

高橋たか子は、1981年に『装いせよ、わが魂よ』を、1985年に『怒りの子』を発表している。その年、修道会に入会を機に、「これで小説家としての終わりだとの思い」（高橋 1994c）をもった。『装いせよ、わが魂よ』は、明らかにこの転換期を示す作品といえる。1985年以降、新たな小説の執筆はなく、エッセイと霊的著作のみとなる。この時期を、本稿では第三期とする。1989年、日本の修道会入会に際し、「一切の執筆をやめるばかりでなく、これまでの本も絶版にすべく各出版社に依頼」（高橋 1994c）した。

次にその作品群の基調となるテーマを、悪意、母性、キリスト教に分けて考察を進めていく。

## 2. 悪意ある女主人公たち

森田（2001）は、明治40年代の男性小説家たちの作中人物における「人間生活の根本的状態」としての不機嫌（山崎1976）と対比させることで、1970年代、80年代の女性作家たちの作中人物にみられる「不機嫌な女たち」を、その時代の特徴であるとしている。これは、前出の「女性の異常な衝動を描くことは、敗戦後の日本の文芸の主流のひとつである」とする鈴木（1999）の主張に通じるものだといえるだろう。はたして、高橋たか子の作中人物は、単に不機嫌なのだろうか。単に異常な衝動にかられているだけなのだろうか。

高橋たか子の女主人公たちは、高橋たか子自身が、夫和巳の死によって社会的束縛から解放されたように、自由な存在である。現状に満足はしていなくと



も、生活は苦しくとも、彼女たちを縛るものは、たいていの場合、彼女たちの内面と、子どもの存在だけなのである。束縛から自由を得た通常の規範を無視した、犯罪にも近い、いや殺人をさえも犯している女主人公たちは、悪意に満ちている。他者との関りを拒み、とくにそれが自己の個としての存在をおびやかす子であったり、あるいは自分の存在を否定するかのような夫という男の存在であったり、他の女、母、母と子であったりすると、女主人公は、それらを全力で破壊に導くのだ。悪を行う主体も、それを受ける相手も、たいてい女性である。作中人物は、娘を死なせ、妹を殺し、鳥の卵を踏みつぶす。しかも、女主人公たちは「完全犯罪」を犯す。法に罰せられることも、世間の批判をあびることもない。それはキリスト教における罪、「無意識の中にさえ存在する悪意」とは異なるものである。第1期、第2期創作活動にある高橋たか子は、まだ洗礼こそは受けていないものの、キリスト教における罪の認識はあったはずである。キリスト教徒でない女主人公たちは、高橋たか子の分身として、全全霊、悪意をもって罪の意識に立ち向かうのである。

高橋たか子の女主人公たちは、皆孤独であり、他者との交わりを拒絶する。特に子どもに対しては、憎悪をい込む。電車の中で眼前にした乳児の「むっちりした生白い」足を刺繍針で突き刺してしまう『渺茫』の清子。自分の傍らにあって自分と同じことを感じ、同じしぐさをする小型の自分である娘を憎悪する『相似形』の明子。友人が望まない結婚をして生んだ子供が、崖から落ちるのを凝視する姿を思い描く『夏の淵』の「私」。『空の果てまで』の久緒は、かつての級友の娘珠子を誘拐したことが「完全犯罪」だと思い、自分の最後の犠牲者だから自分のこどもなのだと、逆説的な思いを抱く。

さらに、高橋たか子の女主人公たちは、理性の制御の及ばない肉体を嫌悪し、その肉体をもつ「人」を嫌悪する。失恋という状況は、それが自分自身の身におこったことであっても、他者におこったことであっても、「余計な事」である。それは、個としてあるべき「女」の否定につながる。失恋によって内臓が痛むような肉体的感覚を、「自分が内臓だけの存在」になってしまいそうに感じる。それを排斥することで、自己を取り戻さなくてはならない。そのためには、相手への関心を抹消することだ。自分が自分で納得できないような事態を、『誘惑者』の哲代は受け入れられない。「私」はあくまでも意識的主体でなくてはならない。他への感情が、肉体の痛みとなって個を揺るがすのなら、その感情を断ち切らねばならない。ここに女としてではなく、一個の人間として生きたいと願う高橋たか子自身、あるいはその分身がいる。

このように、高橋たか子の作品には、悪または悪意の記述が多い。しかし、

その作品群は猟奇的な犯罪小説でも、推理小説でもない。普通の人間たちの中に、実際の行為として、あるいはその欲望として設定されている（大橋 1981）。女たちはただひたすらに自分が個であることを脅かす存在を破壊し、破滅に導く。その不幸の連鎖が断ち切られることはなさそうに見える。それが高橋たか子の執筆第二期の終わりになり、修道生活を始めるころになって、作風に変化がみられるようになる。『装いせよ、わが魂よ』では、最後に高橋たか子の分身が、破滅ではない道を歩みだそうとするのである。

ここまでみてきた他への悪意は、他のキリスト教作家の取り上げる罪や悪意のテーマとは趣を異にしている。女主人公たちは、本能的に自分という個を守るために、攻撃に出る。他との共生、共存はなく、彼女たちの意識の中に神はいない。しかし、高橋たか子の求めているのは、まさしく神ではなかったのか。他を破壊することに個の存続をもとめながらも、破壊は破壊に、破滅は破滅にしかつながらない。すべての自我がなくなったところに、高橋たか子のいう「研ぎ澄まされた意識が濃縮」し、そこに神をもとめていたのではなかったのだろうか。

一方、遠藤周作の作中人物たちは、弱さから罪をおかす。無意識から罪に流される。そして、無意識の罪もまた罪である。『海と毒薬』の勝呂のように、置かれた状況で選択肢を提示されながらも、現実には抗うことはできず、またなぜそうなったのか理解もできないところで、罪をおかしてしまう。しかし、そこには「同伴者としてのイエス」の救いがある。その救いは、すべてを許し、ともに歩んでくれる母なる神に通じる母性である。

次に、母性の在り方を、高橋たか子の作品の中にみてみよう。

### 3. 魔性に対峙するものとしての母性

魔性の対局として母性というものがあるという考え方がある。高橋たか子の中から小説の中へと登場してくる女主人公たちには、母性の女はいない。高橋たか子の書く女たちは、

「どれもこれも魔性の女たちである。＜中略＞ だが、女とは究極のところ母性なのだという安全な思想によって、女が眠らされているとすれば、私は、女はそれだけのものではないと主張したいのである。

＜中略＞（女には対局する魔性の女と母性の女、あるいは娼婦と母の二通りのタイプがあると、男性は分類するが）たまたま何事かによって目覚めた女が魔性の女なのであり、目覚めない大多数の女は魔性の

部分を生き埋めにさせたままにしているだけなのではないだろうか。」(高橋 1976)

異常な母性の、あるいは母性の欠落の例として、まず『空の果てまで』の久緒を挙げよう。久緒は、乳児の自分の息子を火事の中の置き去りにし、助けようと火の中に飛び込む夫をも見送る。夫は、うすうす気が付いてはいた妻の、他者への愛情の欠落を、このときはじめてはっきりと認識するのである。そして助かる見込みのない、火の燃え盛る家の中に飛び込んでいく。これは自己犠牲であり、親の愛であり、母性の欠落している久緒と対比するものである。息子と夫は、この火事で焼死する。その後、久緒は一人暮らしを始めるが、女学校時代の級友に出会う。うとましい相手であった。関わりたくもなかった。女性として、母として、充実した生活をおくる相手であった。その恵まれた疎開先で、彼女が産んだばかりの娘を、久緒はさらう。衝動的な行動であった。しかし、懸命に乳をさがし、さらってきた赤ん坊を育てる。それは久緒の中にある、いびつな母性といえるのだろうか。自身の母性の欠落を確認し、母を個たらしめることを拒む子を突き放し、拒絶することのみを目標として、その子を育てるのである。そこに激しい憎しみがあるわけではない。珠子をさらってきたのは自分であり、珠子が久緒の個をおびやかしたわけではないのだ。むしろ激情の欠落である。母性の強さゆえの歪んだ愛憎ではない。珠子が赤ん坊のとき、その顔をたたき「みにくくなあれ、みにくくなあれ」と念じながら、ただひたすらに他の不幸を願うところは不気味である。久緒を通して、高橋たか子自身が母性を不気味なものとして考えているからではないだろうか。

母性に対する恐怖心は、他の作品にもみられる。『子供様』では、母親が自分の娘と胎児に異常な嫌悪と恐怖心を抱いて、ついには胎児の命を絶つために自らが崖から落ちて死のうとする。

これまでみてきたように、高橋たか子の作品で扱われる母性は、魔性の対角線上にありながら同一のものであり、一人の女が併せ持つものだと考えられる。高橋たか子の作品の中の女たちには、やさしさのかけらもないが、それが他者には一見して分からないところに本当の恐ろしさがあるのではないだろうか。返して言えば、母性もつやさしさ、慈しみのイメージは、より一般的なものなのである。あるいは、人は一般的に母性にやさしさと慈しみを感じるのである。これこそ高橋たか子が敵対するものである。高橋たか子が母性を嫌悪したのは、母性が大勢の作り上げた言説であって、女はみな、母性という救済の仮面の下に魔性をかくしていると考えているからである。母性を嫌悪するというより、母性の仮面をはぐこと(水田 1999)に熱意を示しているのだ。



高橋たか子にとって悪意でしか表現できない母性は、遠藤周作にとってどのような意味をもつのであろうか。

#### 4. 遠藤周作にみる「母性」

小嶋（2014）は、1960年代後半の文学作品に描かれた「母性」を考察する上で、高橋和巳の『邪宗門』、そして遠藤周作の『母なるもの』を取り上げている。男性作家ふたりを考察の対象としたところで、前出の鈴木（1999）と森田（2001）とは立場を異にすることが明らかとなる。高橋和巳は高橋たか子の夫である。遠藤周作は、高橋たか子にとって、同じフランス文学、とくにモーリアックの影響を強く受けた作家としての先輩であり、高橋たか子に受洗をすすめた人物でもある。高橋たか子にとって、もっとも身近な、強い影響力をもっていたと思われるふたりの男性の、宗教をめぐる「母性」のとらえかたが、高橋たか子のそれと対局をなすものであることは、興味深い。母性は、その三者のいずれにとっても、格別の意味をもつものであったのだ。

小嶋（2014）は、『邪宗門』で提示された「真の信仰」を有するものとして大見サトを描いたこと、『邪宗門』の語り手が巻末で阿貴に密着することなどから、「真の信仰」の担い手が女性であり、そこに「母性」が意図されているとしている。遠藤周作もまた、日本の宗教の原点を母性だとする。母の愛が、キリストの愛である。これは特異な考え方ではない。とくにカトリックにおける聖母マリアの地位は高い。小嶋の分析に従うなら、高橋和巳と遠藤周作にとって、母性は神性であったことになる。

次に、遠藤周作にとって、実際の母、郁がどのような意味をもっていたのかを考えてみることにする。

遠藤周作の私小説的作品では、主人公が10代のときに母親が亡くなってしまうことが多い。それで、母との死別があたかも遠藤周作自身におこったことであるかのような誤解をあたえてしまうことがある。実際には、母郁が亡くなったのは、遠藤周作が30歳の時のことである。年譜をみると、遠藤が20歳の時に、それまで疎遠であったはずの父のもとに身を寄せている。慶応大学入学がきっかけとなったようだ。しかしそれは、遠藤が5歳のときに離婚した母郁に対する裏切りであったろうことは、想像に難くない。母郁は、気性の激しい人であったようだ。作品の中で母を死なせ、昇華することで、遠藤の中には理想の母親像、そうあってほしい母の姿が生まれたのではないだろうか。無条件にすべてを許す慈しみの母は、遠藤にとっての現実の母ではなかったが、そうあってほ

しいと願った母の姿であつたろう。慈しみ深い「母」をもとめて、遠藤はキリスト教に傾倒していったのではなからうか。

遠藤周作がカトリックの教えの中に母性を見出した背景には、自分の母への敬慕、同時に現実の厳しい母からの逃避もあったことであろう。そもそも、遠藤周作は12歳で洗礼を受けている。これは強く母と伯母に影響されたからであつて、心からの信者ではなかったことは、自身がたびたび言及している。父親不在の家庭に育った遠藤周作が、信教の根幹に父性ではなく母性をみたことは、自然であるともいえよう。

絶対唯一神不在で、八百万の神を信じる日本の精神風土には、キリスト教は受け入れられにくいとされる。実際に、幕末明治にかけて、異国趣味のように輸入された概念ではあり、当時の知識層にとっての通過儀礼ともいえるようなキリスト教入信が多かった。それを遠藤周作は「身に合わない服のよう」と表現している。筆者も1971年の遠藤周作のキリスト者としての執筆活動を語る講演で、この表現を聞いている。遠藤周作は日本人の心にあうキリスト教を創りだすことを一生の課題（本多 2001）としたが、それは人間の同伴者としての神、人をどんな悪からも救ってくれる許しの神であり（遠藤 1990：115）、母なる神の宗教であつた（久保田 1992）。

最後に、あくまで高橋たか子がこだわった「個」でありたい、「個でありつづけたい」という願望と、キリスト教との関係を考察することで、キリスト教が高橋たか子にとって、どのような意味をもっていたのかを考える。

## 5. 「個」の追求とキリスト教

高橋たか子は、男と女の間には、「どうしても越えられない淵」があり、そのため男と女は、言葉も感動も共有できない、なぜなら、男と女は根本的に相容れないものなのだという。男には女の内面の眼が捉える女の真実が分かりようはなく、男の捉えるそれは、本質的に異質なものののだ。女の眼が外側から捉える男の像の表す真実を直視することもまた、女性作家の仕事であり、これは十分に描き尽くされてはいない、と高橋たか子（1973）は語る。相容れない男の眼、女の眼というとらえ方は、男と女はどこまでも相容れないものなのだというに等しい。

その自筆年譜にあるように、高橋たか子は、京都の男尊女卑の風土に嫌気がさし、ノイローゼにもなり、夫高橋和巳が京都大学の教職についたときにも、同行を拒否している。自分より才能のある偉大な夫を支えるために働き、また



口述筆記などもこなし、献身的に介護をし、最期をみとった高橋たか子ではあり、現実社会で男女格差、男女不平等の是正を求めて運動を起こそうという気持ちはなかったのかもしれない。しかし、魂の独立は、個の確立は、高橋たか子にとって、生涯をかけた課題であったと思われる。

「子供に対する恐怖や憎悪」（関野 2005）は、個であることを阻むそれに対するものである。同時に、その罪の意識も大きい。高橋たか子にとって、自分自身の中の女、あるいは母性を否定することに対する罪悪感が、自己処罰の願望となっているのではないだろうか。これを関野（2005）は「作者の潔癖さ」故であるとする。そうやって、高橋たか子は「夥しい死によって生を描いている」のだという。

個でありたいという願望ゆえの子への憎悪は、肉体的つながりを拒否する。それが体液への憎悪につながる。赤ん坊の瑞々しさを憎悪し、切り刻みたいという衝動、あるいはその妄想にかられる。個であるべき自分の中に生まれる別の個に対する嫌悪である。

水田（1999）は、「高橋たか子は、女性を体制にとっての他者として分類してきた従来文化に対する、女性自身による女性の自我の＜発見＞を、女性の自己表現への欲求として、近代女性の新しい自己認識を定義している」という。女たちは、自我を内面に隠すことによって生き延びてきたのである。高橋たか子が言う魔性の女の本性とは、体制内に生きる女性の内面に潜む、表面にはあらわれない女性の自我である。それは、すべての女がもつものである。自己の中に魔性をさぐりあて、それをモチーフとして描き出した高橋たか子は、本当の自我を探し当て、自立することを望んだのだ。

高橋たか子の女主人公たちの飽くなく個の追求は、自身の中の魔性を掘り起こすものである。と同時に、母性の面をかぶった他者を引きずり込み、その面をはがし、自分自身の分身であること確認するという狂気の行動を繰り返す。不幸の連鎖は限りなく続く。何が救済となるのか、救済はおこりうるのか分からない。ただ存在するということがすなわち不幸なのだ。他者を破壊し、その自我を破壊することは、結局自分の相似形をうみだしてしまうことにつながる。第二期までの作品にみられる救いのない不幸の連鎖は、『装いせよ、わが魂よ』で一変する。ようやく救いの神がみえてきたのだ。高橋たか子の分身が、破滅ではない道を歩みだそうとするのである。

高橋たか子の作品にみる「個」の追求の解釈については、意見の分かれるところである。個の追求は、他を否定し、他と交わることを拒絶することから、抜本的に人間否定であるという解釈もなりたつ。しかし、その他の作品同様、

個の追求をみながらも、大橋（2005）は、『夏の淵』には他の作品にみられない「幸福という観念」が描かれていることに注目する。そこには、表層的な悪が描かれているだけではなく、より人間の真相にかかわる根源的な罪が描かれていると考えられる。ただし、幸福を求める人間が罪を犯すという逆説的な構図もみられる。

高橋たか子は、「私」の確立を追求して、人間を超えた人間外の神または悪魔に就くことで、自我の制度を超脱しようとする。「近代の理性的自我そのものが近代の制度的所産の人間観」であり、その制度としての自我をこえて私を確立したいという欲求から自由になるために、自我の制度から超脱しようとするのである。高橋たか子が、たとえば大庭みな子や富岡多恵子と違うのは、「女という性の生の可能性」を追求しないところにある。江種（1986）は、「制度的存在としての妻や母であることの不自由・不幸は、それらが制度からくるものであるなら当然制度から自由になる方向で、女の性の根源に立ちかえって生き切る姿勢の肯定という方向に向かう」とする。ところが、高橋たか子の場合にはそうではない。

絶対的な個としての「私」は、生殖を拒否する。母性は自分の幸福のためではなく、他者の幸せのための条件である。高橋たか子の個の追求は、やがてキリスト教入信、そして修道会への入会へとつながっていく。

『装いせよ、わが魂よ』以降の作品では、自他を問わず、誰かが犠牲になることで、苦痛を伴いながらも、ある明確な目的にたっしようという意識が存在することが特徴で、そのほとんどが神にかかわるものであり、生命の圧迫や殺にはつながらない。犠牲を認識することにより自己の内面的な苦痛がもたらされ、その痛みがその人物を新たな認識へ導くという構造が、この犠牲の様式に表現されている。『怒りの子』以外の、『亡命者』をはじめとする三部作にはっきりとした形で「神」が示されている。

## 6. おわりに

高橋たか子は、京都大学在学中からフランス文学に感銘し、生涯を通して深く影響を受けた。特にカトリック作家としてのモーリアックには、その主題である罪の意識においても、また虚構の世界の作中人物に自分自身の分身を重ね合わせながら、風景の中で同化していくプロセスを学んだ。これは多分に遠藤周作にも通じるところである。

高橋たか子のための悪は、自分自身の中ばかりでなく、すべての女の中に

ある魔性と母性の葛藤に由来する。悪は、女の中に内在するものだという。高橋たか子は女の、ひいては自分自身の中の悪を探求し、突き詰め、そのエッセンスとなったものを抉り出そうとする。それが内在するものであっても、容赦なく、完膚なきまでに叩きのめそうとする。すべてを無にしてしまおうとする。そうすることで個であることができ、魂の自由が得られるかのようなのである。高橋たか子にとって、母性とは、仮面をかぶった魔性に過ぎない。母性は魔性の対角線上にあり、ひとりの女の中に共存するものである。たいていの女は、母性の面をつけた魔性の女なのである。母性を否定し、生殖を拒み、あくまで個であろうとすることの究極の目的は、神との同一化であり、高橋たか子にとってのキリスト教だったのではないだろうか。

一方、遠藤周作の取り上げる悪は、無意識のうちにふりかかってくる災難にも似ている。人は弱い。弱い人に、悪魔はつけ込む。その弱さを、キリストは同伴者として、ともに苦しみ、そして何度でも許してくれる。遠藤周作にとっての母性は、神の愛であり、「日本人の身に合った」キリスト教であった。遠藤周作は、現実の母親の強い影響から逃れるため、その創作の中で母を殺し、代わりに母性の理想像を据えた。遠藤周作にとって、母性は悪と対角線上にあるもので、悪からの救いを意味した。自身の中に母を持たない、男である遠藤周作は、母を殺すことで母性との同一化を果たしたといえるのではないだろうか。そして、それが遠藤周作にとってのキリスト教だったのではないだろうか。

本稿では、高橋たか子の執筆活動は、夫高橋和巳が亡くなるまでを第一期、その後『装いせよ、わが魂よ』までを第二期、そしてその後を第三期と分けた。草稿、執筆時期と出版とは必ずしも一致せず、作品によっては数年から十年近くも間があくことがあったようだ。しかし、その節目ごとに、高橋たか子の特異性ともいえた凄まじいまでの悪意は薄れていく。最後まで残るのは母性の否定である。母性を否定することが、高橋たか子にとっては、個の独立を意味したのではないだろうか。個の独立は、性を超え、神との同一につながった。キリスト教信者としての魂の救いである。高橋たか子が小説を書く目的は成就された。自筆年譜によれば、53歳のとき「会」に入会を控えて筆を置く。

高橋たか子は、「悪意」をつきつめ、「母性」を否定することで、ようやく自己の中にキリスト教の神を発見したのであろうか。

## 引用文献

大橋寿美子（1981）「現代文学における人間と悪」—高橋たか子をめぐって—  
『同志社女子大学学術研究年報』 32(3), 337-347



- 大庭みな子・高橋たか子（1982）「根源的な生命の不可思議」（対談）『新潮』  
79（12）、170-200
- 小嶋洋輔（2014）「文学と「母性」：高橋和巳『邪宗門』と遠藤周作『母なるもの』から 名桜大学紀要 19、1-12
- 佐々木基一・上田 三四二・秋山 駿（1973）「創作合評—三木卓「五月二三日・夜」森内俊雄「マラナ・タ終篇」高橋たか子「夏の淵」『群像』 28（12）、260-276
- 鈴木貞美（1999）「ロンリー・ウーマン—出発期をめぐって」中川成美・長谷川啓編『高橋たか子の風景』彩流社 25-38
- 関野美穂（2005）「＜犠牲＞という様式美—高橋たか子の表現様式について」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』 35、93-105
- 高橋たか子（1973）a 「モーリアックと遠藤周作—無意識と第三のディメンション」國文學：解釈と教材の研究 18（2）、110-113
- 高橋たか子（1973）b 「「背徳」覚書（作家ノート）」早稲田文学 [第7次] 5（7）48-51
- 高橋たか子（1975）「私と「私」の関係」（文学の原点「私」—文学における「私」とは誰か（特集））『文学』 [第7次] 7（1）、12-13
- 高橋たか子（1976）「性—一女における魔性と母性」小森陽一・沼野充義・松浦寿輝（編）『岩波講座 文学〈11〉身体と性』
- 高橋たか子（1977）『高橋和巳の思い出』構想社
- 高橋たか子（1994）a 「装いせよ、わが魂よ」『高橋たか子 自選小説集』4、8-382
- 高橋たか子（1994）b 「暗夜を通過して」『高橋たか子 自選小説集』4、529-552
- 高橋たか子（1994）c 「自筆年譜」『高橋たか子 自選小説集』4、553-578
- 久松健一（2010）「遠藤周作訳『テレーズ・デスケール』から見えてくるもの（上）」『明治大学教育論集』（452）、121-147
- 本多峰子（2001）「遠藤周作試論 「＜母なる神——西洋キリスト教と日本人の宗教観の相克と、宗教多元論的解決＞」 『二松学舎大学東洋学研究  
所集刊』 31、55-81
- 増田みず子（1999）「空の果てまで」中川成美・長谷川啓編『高橋たか子の風景』彩流社 83-101
- 森田亜紀（2002）「不機嫌な女たち—女性小説家の描く女性像から」『倉敷芸術科学大学紀要』7、29-39
- 水田宗子（1999）「絶対的な他者を求める不毛な自我の円環」中川成美・長

谷川啓編『高橋たか子の風景』彩流社 13-24

山崎正和(1976/1986)『不機嫌の時代』講談社学術文庫

吉川豊子(1980)「高橋たか子の「魔性の女」(母性神話の崩壊-母性と文学-崩れゆく神話<特集>)-(母から女へ-現代女流作家群像)」『国文学解釈と鑑賞』45(4), 67-73

## 参考文献

Friedan, Betty (1963) "The Feminine Mystique" W. W. Norton and Co. 239

遠藤周作(1990)『イエスに選んだ女たち』講談社

久保田暁一(1992)『日本の作家とキリスト教-二十人の作家の軌跡-』朝文社

田川建三(2006)『宗教とは何か 上 宗教批判をめぐる』洋泉社新書

高橋たか子(1958)「モーリアック論(その一):その主要作中人物について」  
Francia 2: 43-51

高橋たか子(1959)「モーリアック論(続き):その主要作中人物について」  
Francia 3: 42-49

武田友寿(1981)「女人(高橋たか子)-現代の巫女…高橋たか子の描く女人像(カトリック作家群像<特集>)-(作品にあらわれた問題)」『国文学解釈と鑑賞』46(10), 173-175

# A Comparative Study on Evil, Motherhood and Christianity in the works of Takahashi Takako and Endo Shusaku

Naomi CROSS

Heroines in Takahashi Takako's earlier works are evil to the extent that they are criminals. If they are not committing the crime of infanticide or grievous bodily harm, they are fantasising about it. Takahashi Takako claims that heroines of her works are indeed her other self. She argues that motherhood and devilishness are two extreme characteristics that all women hold and conventional society conditions women to "wear motherhood" and behave as good motherly beings supressing their enchantress nature. The denial of motherhood and seeking of true self in the other hidden self is the main motif. To be a singular self, independent of others, Takahashi Takako's heroines reject reproduction. They loathe babies and children, or perhaps life itself. Mother figures in Takahashi Takako's world are helpless, miserable and unhappy. Her protagonists', and Takahashi Takako's for certain, rejection of motherhood and reproduction are to secure independency of self. Only through such independence, these women believe, their souls are saved. Endo Shusaku, who influenced Takahashi Takako and was instrumental in her conversion to Catholicism sees Motherhood to be the face of a Japanese variety of Christianity. To him, mother love represents Christian faith. Curiously, he 'kills' his mother in his semi-autobiographical works and creates an all forgiving epitome of motherhood, which his real mother was not. This paper compares and contrasts the way two authors see evil and motherhood against the backdrop of Christianity.